

大伴家持の歌一首―大伴家持の古画にそえて―

高城 弘一（竹苞）

Koichi (Chikuko) Takashiro

江戸期に描かれたと思しき歌仙絵をたびたび落手し、この何年か、その歌仙の詠歌を書き組み合わせ、一つの作品となるような創作活動を行っている。本誌『大東書道研究』（大東文化大学書道研究所発行）や大東文化大学発行のカレンダー、グループ展などに随時発表している。

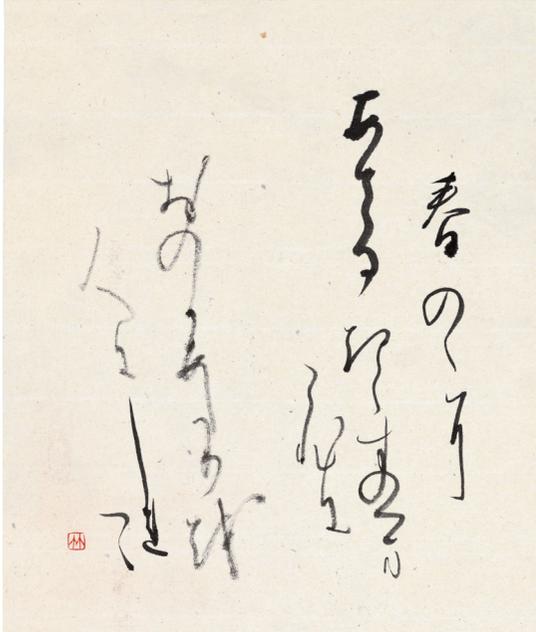
近時、江戸時代中期に描かれた、三十六歌仙の歌仙絵およびその歌仙の歌が書かれた色紙が貼られた屏風を落手した。屏風の状態がよくないので、崩すことになった。歌仙絵自体の状態も不良なものが多い中、今回、比較的傷みの少ない大伴家持の歌仙絵のみを使用した。歌は、添えてあった色紙に書かれたもので、『万葉集』（一四四六）はもとより、藤原公任撰『三十六人撰』をはじめとする、多くの秀歌撰にも収録されている名歌である。この歌仙絵は、絵解きのようなもので、きぎす（＝雉）が上部に描かれているのが明瞭であらう。

料紙は、在庫の楮紙の素紙（詳細は不明）を使用。墨は、古梅園製「山羊膠油煙墨」をやや淡墨にして使用した。筆は、神技堂製「極品鼈毫もみじ」で、潤濁・太細はもちろん、行間や行の流れの変化もつけた。特に、渴筆では筆圧をやや加え、弱くならないような配慮もした。

今回用の書き下ろし作品である。

【釈文】

春の、に／あさるきゝすのつま／こひに／おのがあたりを／
人にしれつ、



本紙寸法、
各縦32.4×横27.1cm